

逆さ富士と十字架

(ヨハネ一九・三〇他)

火曜は母校の卒業式に出席し、金曜には新高一生の合格の知らせを聞いた。それぞれが実に「春」の一コマであるが、この季節になると思い起こすことがある。それは神学生の伝道旅行の最中、とあるサーブエリアで見た一枚のポスターである。被写体は満開の桜と富士山、しかも水面に写るいわゆる逆さ富士。実に美しい。日本人に生まれてよかったと素直に思える構図である。

逆さ富士は山と谷の融合である。水面に映る頂上は最低点であり、青空に屹立する頂上は文字通りの頂点だ。そんなことをぼんやり考えていたら、逆さ富士と十字架の間には一つの類比があることを見つけた。今朝はヨハネの福音書の十字架の記事と、共観福音書のそれを比較し、その類比について説明を試みたい。

一、谷底にある苦難の十字架

まず注目すべきは水面に映る富士山、すなわち「谷」である。それはな

だらかなく字型を描いている。下降から上昇という流れをそこに見ることは自然である。時に聖書を読むとイエスの十字架と復活をそのような枠組みで理解している箇所は実に多い。例えばあのエマオの途上(ルカ二四章)において主は「キリストは必ず、そのような苦しみを受けて、それから神の栄光に入るはずではなかったのですか」と言われているし、パウロもまたギリシア人への手紙の二章において当時流布していたキリスト賛歌に「十字架の死」というフレーズを加え、天からの降下と十字架の死、そして復活、昇天と続くいわゆる「勝利のV」を鮮やかに描き出している。更にヘブル一二章にも「目の前に置かれている喜びのゆえに辱めをもつとせざるに十字架を忍び」といった記述がある。これらの記述は皆十字架に苦難と悲しみ、悩みと恥を見ているのだ。

二、山頂にある栄光の十字架

十字架は極刑であり、その残忍さは筆舌に尽くしがたい。しかも死刑囚イエスは無罪である。そう考えると十字架に谷底を見るのは全くもって自然な理解である。しかし、私たちが一年以上かけて学んできたヨハネ福音書ではそのように十字架を描かない。むしろこの福音書に描かれる十

字架は神の栄光の成就そのものである。カナの婚礼(二章)においても、また十字架につけられる半年前の仮庵の祭り(七章)においても、イエスは「わたしの時はまだ来ていない」と言われている。ではイエスの時とは何だったのだろうか。その謎を解く鍵は七・三〇にある。そこにはイエスの教えを拒絶した人々がイエスを捕らえようとしたが出来なかったことが書いてあり、その理由として「時が来ていない」ことが挙げられている。つまりイエスの時とは彼の捕縛と受難と関連していると言える。他方イエスはあの大祭司の祈り(一七章)において自らの時と栄光を結び合わせている。そして今朝の箇所では栄光はまた成就でもある。そのように考えると、イエスの十字架はまさに栄光の王座である。思い出そう。いばらの冠をかぶせられた傷だらけ、血だらけの受刑者の上には何と書かれていたか。そう「ユダヤ人の王」と書かれていたのだ。「自称」ではない。あの日、彼は確かに栄光の王、勝利の主だったのだ。

* * *

片岡伸光先生が召されてから十五回目の春がやってくる。当時先生はシンガポール日本語教会の牧師、私はその教会の神学生であった。K G Kの全国総主事

から轉身、家族そろって熱帯の国に移住された。専任の牧師を迎えた教会は大いに力を得、充実した宣教活動が展開された。その最中、彼は病に倒れた。消化器系最後のガン、すい臓がんである。医者に見立ては残酷なほど正確で体調は悪化の一途をたどった。六尺豊かでスポーツマンの先生はどんどんやせた。そして二〇〇二年の二月某日、召されるふた月ほど前のこと、先生はふらふらしながら礼拝堂に入ってこられた。「説教は無理じゃないですか」と言っても聞かない。「せめて座ってやってください」と役員の本山兄と説得を試みたが断固拒否。私たちが借りている聖公会の会堂は冷房もない。彼は講壇に立った。聞きやすい説教では全くなかった。元気なころの先生のそれとは明らかに異なる語り口だった。しかしぐらつく体を何とか保持しようとして講壇に手を付きながら語る先生の姿に私は御子の栄光を見たような気がした。苦難の中にある勝利の栄光を。今は苦しみに意味を見出さない時代だ。だが逆さ富士と十字架を交互に見、イエスと片岡師の人生を並べてみるなら苦難の中に輝く栄光を見ないのは残念と言わずにはおれない。十字架の苦しみと恥の中に隠れる栄光の成就を見つめ続けるものでありたい。「へ荒削りの木は主イエスの王座なり」アーメン。